

2016 年度 センター試験 国語（現代文）（本試験） 分析

全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	大問数：2 題	解答数：20 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化	○ 変化なし ● やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	● 変化なし ○ 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	○ あり	● なし

総評

新課程を意識したのかどうかは分からないが、昨年に比べてやや易くなっている。評論はポストモダン状況でのアイデンティティを「キャラ」から論じた文章で、昨年に続いてポストモダン状況を論じた文章が出題された。文章量が昨年比で約1ページ減少し、各設問の選択肢も昨年に比べると判別しやすい形で作られていて、昨年よりも取り組みやすいと言える。問 5 の傍線部説明の選択肢が生徒の発言という形で構成されていた点が、例年にない形であった。小説は、昨年度、問題文の文章量が大幅に減少したのに反して、昨年よりも1ページ分ほど増加した。1950年代の三等車の情景を描いた小説で、現代とはかなり時代状況が異なるのでイメージがとりづらい受験生がいたかもしれない。設問は例年並みのレベルであった。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第1問	土井隆義『キャラ化する／される子どもたち』	50 点	人々に共通の「大きな物語」が失われた現代社会において、個人はかつてのような一貫したアイデンティティを形成するのではなく、自らの人格をキャラでイメージし対人関係を形成するようになっていることを論じ、単純化されたキャラを否定的に捉えるのではなく、価値観が多分化した時代における個性の一部として捉えるべきだと主張した文章。昨年度同様、各段落に段落番号が付されている。文章自体は分かりやすく書かれており、比較的読み取りやすかった。
第2問	佐多稲子『三等車』	50 点	4年連続で、小説の全文が出題された。1950年代の三等車の車内の情景を描いた小説である。昨年は1問しかなかった心情問題が本年度は3出題されていた点と、問5で本文全体を踏まえた設問が出題された点が特徴的であった。表現に関する設問は、一昨年まで見られた判別がまぎらわしい選択肢がなく、判断しやすい形になっていた。こちらも全体としては取り組みやすい出題であった。

2016 年度 センター試験 国語（古典）（本試験） 分析

全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	古文：6 題（8 問） 漢文：7 題（8 問）
難易度の変化（対昨年）	古文：○ 難化 ○ やや難化 ○ 変化なし ○ やや易化 ● 易化 漢文：○ 難化 ○ やや難化 ○ 変化なし ● やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年）	古文：○ 増加 ● 変化なし ○ 減少 漢文：○ 増加 ○ 変化なし ● 減少
出題分野の変化	古文：● あり ○ なし / 漢文：○ あり ● なし
出題形式の変化	古文：○ あり ● なし / 漢文：○ あり ● なし
新傾向の問題	古文：○ あり ● なし / 漢文：○ あり ● なし
<p>総評 新課程による大きな変化は見られない。古文は 1996 年追試以来 20 年ぶりに説話が出題されたが、昨年の擬古物語に比べて、和歌が含まれていないこともあり、受験生にとってはかなり読みやすい文章であった。漢文は、著者の見聞とそれに対する感想を述べた文章であり、受験生にも理解しやすい話題であったため、昨年よりも文章全体の内容をつかみやすい。昨年出題された文章全体の内容一致問題は出題されなかった。古文・漢文とも、読解力を問う設問中心に出題されていることは変わらないが、正答を選ぶ時に迷う選択肢が少ないため、昨年より解答に要する時間もかからなかったと予想される。全体的に、解答しやすいと感じた受験生が多いと思われる。</p>	

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 3 問	古文『今昔物語集』 ※平安・説話	50 点	昨年は 3 段落構成であったが、今年は 8 段落構成で、場面の急転が 3 回あった。前書きに関連するのは第 1 段落だけであったため、場面展開を意識して読むことが必要であった。 問 1 では、例年より部分解釈の傍線部が短くなり、基本語句・文法で解答できた。 問 2 では、文法問題で初めて格助詞「の」の用法が問われた。 問 5 の傍線部解釈の問題は、例年のような傍線部の前後のまとまりを読み取るタイプの問題ではかった。しかし、第 2 段落から第 7 段落の傍線部に至るまでの内容を、順を追って理解していれば比較的容易に解答することができる。
第 4 問	漢文『抱経堂文集』 ※清代	50 点	昨年の 207 字から 192 字へと減少し、設問も問 2 の小問が 1 問減った。文章は、句形・句法がほとんど用いられていない読みやすいものであった。また設問は昨年と異なり、文章全体の解釈力重視のものになった。 問 1 の語句の意味を問う問題は、例年 1 問は重要語句の知識が問われたが、今年は 2 問とも傍線部を含む一文全体の読解力が問われた。 昨年は出題されなかった、返り点の付け方と書き下し文を問う問題が問 4 で復活した。このタイプの設問は、重要句形・語句等の知識がなければ解答できないことが多いが、本問は書き下し文と傍線部後述の内容を照らし合わせれば容易に解答できる設問であった。